

グローバルヒストリーと思想史の位置：G. アリギ『北京のアダム・スミス』を手がかりに

世話人（司会）・討論者：中山智香子

報告者：秋田茂（大阪大学・非会員）

土佐弘之（神戸大学・非会員）

G. アリギは、I. ウォーラーステイン、A. G. フランク、S. アミンらとともに、世界システム論者の一人と認められてきた。日本では長らく十分に紹介されなかったが、『長い二十世紀』（原著 1994 年、邦訳 2009 年、作品社）の邦訳が刊行され、その壮大な歴史的構想と理論的・思想的深みが、グローバル世界の長期変動を考える人々を魅了するようになった。『北京のアダム・スミス：21 世紀の諸系譜』（原著 2007 年、邦訳 2011 年、作品社）はこれに次ぐ彼の遺著である。アリギの見方によれば、20 世紀にグローバルなヘゲモニー（覇権）を握ったアメリカは 1980 年前後までに予兆的危機の時代を迎え、金融的局面に入った。D. ハーヴェイらが新自由主義とも呼ぶその時代潮流は世界各地で支配的となったが、アメリカのヘゲモニーは解体しつつあり、中国の台頭とともにアジアの新時代が到来するかと語られる。ここに思想史を絡めて「アダム・スミスの市場社会の後継者はむしろ中国である」としたのが『北京のアダム・スミス』である。

本セッションではグローバルヒストリーと思想史の接点に立ち、経済発展における欧米とアジアの二分法や脱植民地時代の問題、資本主義がはらむ軍事や国家暴力の問題などの分析について踏み込んだ議論を行うために、秋田茂、土佐弘之というお二人のゲストを学会外からお招きした。社会思想史の分野に、異なる学問領域からの視点を交差させるねらいである。秋田氏はアリギを含め世界システム分析を日本に導入しつつ、自身もこの手法による歴史分析を長年てがけてきた歴史学者者である。土佐氏は『長い二十世紀』の邦訳者で、かつ『北京のアダム・スミス』の邦訳版にも大いにかかわっており、国際政治社会学、国際関係論の視点から、グローバルヒストリーに関する認識論的問題を考察している。

当日は世話人兼司会の中山がまず『北京のアダム・スミス』の構成と概要を手短かに説明した。同書は四部構成から成っており、その第四部だけが中国論であって、それ以外の部分では世界システムのヘゲモニー国としてのアメリカの衰退、資本主義と市場形成の区別や帝国主義に関する理論的部分、新自由主義批判の視座とともに、アダム・スミスを新自由主義の源流であるとする批判から分離しようという意図も含まれている。また世界システム分析を手掛ける論者たちによるアジアへの関心が、ほぼ一九九〇年代初頭に行われた世界システム論者たちのセミナー（世界システム分析の一九九一年年次大会）に端を発することを紹介し、アリギもまたこの年次大会で報告を行い、記録としての論考集に共著論考（「東アジアの台頭：一つもしくは多くの奇跡？」）を寄せていること、ただしその際の論者たちの論点が、グローバルヒストリーの中で例外的に「奇跡」的成功をおさめたアジアにおよそ限られていたことに触れた。そして、以上の諸点を本セッションの土台とする旨

を説明した。

ゲストのお二人からはそれぞれ、「「長期の 18 世紀」から「東アジアの経済的再興」へ」（秋田報告）、「グローバルヒストリーのメタポリティクス」（土佐報告）というテーマで、各三十分程度の報告をいただいた。

秋田報告は同氏が現在進行中の共同プロジェクトを紹介する形をとり、その内容は「長期の十八世紀」と呼ばれる十七世紀後半から十九世紀初頭にかけての「大いなる分岐」（ポメラント）というプロセスを視野に入れながら、「海域アジア」という観点から見た場合のアジアの経済的発展を分析したものであった。この「海域アジア」とは、百木至朗の著作などに対応したとらえ方であるという。秋田氏によれば、この観点にそって描かれるグローバルヒストリーは、日本と英領インドの意外な交易関係が認められるなど、従来の西洋的観点から描かれてきたヘゲモニー中心のグローバルヒストリーとは一線を画することになるという。例として示されたのは、一八九三年に開設された日本郵船のボンベイ航路である。そこでは日本とインドの両国が、当時のヘゲモニーとされた英国に必ずしも「従属」するのではなく、むしろそのネットワークを利用する形で英国抜きでの交易を発展させたところが興味深いとのことであった。さらにこれに関して、ヘゲモニー国家と「国際公共財」の関係を考え、アジア諸国・諸地域が一定のコストを支払うことによって、国際公共財を利用できるという見方ができるという主張がなされた。なおテーマの後半部分である第二次世界大戦後の東アジアの再興については、時間の制約のため割愛された。

続く土佐報告「グローバルヒストリーのメタポリティクス」は、同氏の最近の著作『野生のデモクラシー：不正義に抗する政治について』（青土社、2012年）の序章「メタ・ヒストリーの政治：人民主権のトランスナショナル化との関連で」をひとつの手がかりとしながら、秋田報告によるグローバルヒストリーをもその一例とするような形で、さまざまなグローバルヒストリーの描き方を比較考量し、アプローチの違いを分析するものであった。冒頭では地図にあらわれた歴史観の一例を示しながら、歴史が現在の覇権的権力の関心に引きずられた「実用的な過去」になる場合があることを述べたうえで、線形（進歩史観、終末史観）、円・螺旋（循環史観）などのメタプロットの類型に軽く言及した。次にグローバル権力の拡散、シフトによって国民国家を単位とした従来の歴史観が見直しを迫られていることにふれ、特に中国の台頭によって西洋中心主義史観やオリエンタリズムを再考する必要があることを説明した。さらに中国のとらえ方を「東西再逆転（世界の中国化）」、「国際社会（リベラルな国際秩序）への中国の社会化」、「ハイブリッド化」の三つに類型化し、それぞれの概要と問題点を指摘した。

両ゲストの報告はいずれも興味深くまた議論を喚起する力をもっており、時間はやや延長したものの、セッションの議論にとってきわめて示唆的であった。

後半の討論部分ではまず手短かに登壇者相互の質問、コメントをおこなったが、ゲストの両氏の立場の違いを浮き彫りにすることになった。秋田氏が長いスパンでの中国のとらえ方に力点を置いたのに対し、土佐氏は現在から近未来にかけての中国を問題としたからで

ある。次いで討論者として中山がまず秋田氏に、「国際公共財」として利用という側面を強調することによって、その利用が宗主国の統治の枠組に留まる限りにおいてのみ有効という側面を見えなくしてしまうのではないかという点、またイギリスとアメリカの統治方法の違いがあるのではないかという点を質問し、次いで土佐氏が軍事的なもの（実質的にはクラブ財）を公共財と位置付けることの問題性を指摘して、中山の質問をより明確な論点として提示した。秋田氏はこれらを認めつつも、それが自由貿易体制をどこまで広げて理解するか相違であると確認した上で、あえて異なるグローバルヒストリーを描くことの可能性をあらためて強調した。

続いてフロアに討論を開いたところ、世界システム分析とグローバルヒストリーの関係についての質問があり、また歴史と思想史の関係を問うという本セッションの主旨にも関わらず思想史的な議論が欠落しているのではないかという指摘があった。これに対して両ゲストによる回答を得た後、中山がセッション企画者として、前半部分や登壇者のやりとりで盛んに用いられている「ヘゲモニー」がA. グラムシの概念に依拠しており、またアリギによるグラムシ思想の受容という論点を含むこと、またアリギによるヘゲモニー・シフトの議論がトロツキーの「不均等発展」の考え方を摂取しつつ展開されたものであることなどを回答した。また「北京のアダム・スミス」が実は「デトロイトのマルクス」（イタリア・マルクス主義者M. トロンティの用語）と対で語られており、アリギがイタリア・マルクス主義の系譜に属することも指摘した。これらを受けて質問者からはさらに、思想史をグローバルヒストリーの内部とするか外部とするかを考える必要があるという指摘があった。

その後も産業資本に関する質問や、ユーラシア経済圏を視野に入れたグローバルヒストリーの可能性に関するコメントなど活発な議論がさまざまに展開された。参加人数はセッション開始の時点では十五人程度であったが次第に増加し、セッションの中盤以降には三十人程度の参加者となって、きわめて実り多い議論を行うことができたと思われる。

セッション後、ゲストの両氏と会員有志数名が場所を移してさらにインフォーマルな議論を続けたが、両氏とも多岐にわたる質問に丁寧に回答していただき、特に若い会員諸氏にとっては、とてもよい刺激になったようである。ゲストの両氏からも実り多いセッションであったこと、いろいろ学ぶことができたという感想を頂戴し、また社会思想史学会会員になることを検討したいというお申し出も受けることができた。ゲストの両氏とセッションに参加して下さった会員諸氏に心からお礼申し上げたい。